

学びのコミュニティを形成する Canvas を活用した ブレンディッド・ラーニング型教員研修 —新たな研修システムで支える教員の専門性の向上—

京 都 大 学 高見 佐知
神戸常盤大学 山下 敦子
東京科学大学 高松 邦彦

1. 背景

教員の専門性向上は、教育の質を高める上で極めて重要である。中央教育審議会は、『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～を答申した。それを受けて中央教育審議会「令和の日本型学校教育」を担う教師の在り方特別部会は、「令和の日本型学校教育[i]」の推進に資する取組として、新たな教師の学びを研修を通じて実現する方向性を「審議まとめ」として示した[1]。具体的な今後の改革の方向性としては、「新たな教師の学びの姿」の重要な要素として、1) 主体的な姿勢、2) 継続的な学び、3) 教師の個性に即した「個別最適な学び」、4) 他者との対話や振り返りの機会を確保した「協働的な学び」の充実を通じて、教師の5)「主体的・対話的で深い学び」を実現することを示している[2]。加えて、教員研修について、「課題解決を通じた学び」や「現場の経験を重視した学び」、自らの日々の経験を活かし、「他者から学ぶ必要性」等を通して充実を図ることが示されている。

それらの課題解決を図るために、文部科学省は「教員研修高度化モデル開発事業」を創設した。本事業において、筆者らは『Canvas を活用したブレンディッド・ラーニング (BL) 型研修に係る成果指標と評価モデルの開発—「学びのコミュニティを形成する LMS」を組み込んだ BL 型研修の成果と評価—』という研究開発テーマの採択を受けた。これを受けて、筆者らは教員研修の新たな形態と評価指標の開発およびモデル化に取り組んだ。

本研究では、高度な専門職性の向上を目指し、ブレンディッド・ラーニング型研修に「学びのコミュニティを形成する LMS (Learning Management System、学習管理システム)」である Canvas を活用した研修を実施した。さらに、五つの実践事例を通じて、教員の継続的な成長と資質向上を支援する枠組みを構築し、これを成果指標と一体化させた評価シートの形で提示した[3]。

Canvas は、北米の高等教育において、現在最も多く活用されている Instructure 社製品の LMS のプラットフォームであり[4]、研修受講者は、オンデマンドで時間と場所の制約なく研修内容を受講することができる。また、受講者同士のディスカッション機能がシンプルで活用しやすく、相互の充実した交流を図る場を提供できることが特徴的である。先の採択研究においては、Canvas の活用によって教員の個々のニーズを反映させ、主体的・対話的で深い学びを支える環境を提供した。その結果、Canvas を活用した研修方法についての受講者の満足度は、96～100%という高い評価を得ている[3]。

本稿では、五つの実践事例のうち、小学校国語科研修に焦点を当て、ブレンディッド・ラーニング型研修と教員の専門職性の向上との関係について、考察を行うものである。

[i] 令和3年の中央教育審議会答申において、「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」と定義されている。

2. 方法 ブレンディッド・ラーニング型研修の設計

ブレンディッド・ラーニング型の学びについては、米国教育省による複数のメタ分析研究において、ブレンディッド・ラーニング型の学びが、従来の対面授業のみ、もしくはオンライン授業のみよりも、学習成績向上等に寄与することが報告されている[5]、[6]。また、初等中等教育におけるブレンディッド・ラーニングについては、40の教育機関の事例分析を通じて、ブレンディッド・ラーニング型学習のモデル、技術トレンド、成功へのステップを示した研究において、長期的な効果についての結論には時期尚早としながらも、生徒の学習成績向上、中退防止および学習継続効果、コスト削減等について成果を報告し、今後のさらなる普及が示唆されている[7]。

また、日本においては、長濱ほか(2022)によって、教育工学分野におけるブレンディッド・ラーニングに関する広範なレビュー[8]があり、「教員研修・FD」をテーマとする研究においては、根幹となるLMSの重要性、LMSの有効活用を図る教員研修のデザイン、アクティブラーニングの実現、が命題であることが見い出されている(p608)。また、杉浦ほか(2022)の研究では、高等教育におけるブレンディッド・ラーニング型研修の設計と教員研修プログラム、デザインシート等の提案がある[9]。さらに、長濱らは、ブレンディッド・ラーニングにおいては「フィードバックが重要な役割を果たす」ことが明らかとなっているとし、それを含め、「協調学習の利点が最大限発揮されるような導入方法」を検討する必要性を指摘している[8]。さらに、高等教育におけるブレンディッド・ラーニングによる学びに関する今後の展望として、「オンライン学習と対面学習を効果的に組み合わせた標準的な手法の確立」「学術分野に応じた効果的な活用方法の継続的な探究」等の必要性、および、「段階的な改善・改革・革新の積み重ね」「多様な研究の継続的な推進」等の重要性が示唆されている[8]。

このようなブレンディッド・ラーニング型の学びに関する背景を踏まえ、筆者らは、初等中等教育の教員研修においては「フィードバックを活かした協調学習を基盤とした有効なブレンディッド・ラーニングの手法」の確立および効果検証がまだなされていないため、先の文部科学省の採択研究により、初等中等教育の教員を対象とし、学びのコミュニティを形成するLMSを活用したブレンディッド・ラーニング型研修の可能性を探究した。具体的には、Canvasを使用して、「オンライン・対面・同期（オンタイム）・非同期（オンデマンド）」を組み合わせ、LMS上で受講者同士の学びのコミュニティを形成し、教員の「個別最適な学び」「協働的な学び」「主体的・対話的で深い学び」等を担保した「新たな教師の学び」に資する5種類の実践事例、合計301名の研修受講者を通して研修効果を検証した[3]。しかし、この採択研究においては、成果指標と評価モデルの開発がテーマであり、教員の専門性の向上に関する詳細な分析には至らなかった。そこで本稿では、5種類の実践事例のうち、山下による小学校国語科の教員研修に焦点を当てて考察を行う。

先の採択研究では、「オンライン・対面・同期・非同期」の組み合わせについては、一般的な教員研修において実施しやすく汎用性が高いと考えられる、次の3種類の形態を用いている[3]。

i) LMS上での同期・非同期研修を組み込む場合のモデル

ii) 「対面集合研修→LMS研修」の場合のモデル

iii) 「LMS研修→対面集合研修」の場合のモデル

本稿で考察する小学校国語科の研修は、iii) のタイプで、LMSによるオンデマンド研修をCanvasプラットフォームのオンライン上で行ってから、対面集合研修を行うタイプの実践事例である。実践は、令和5年11月～12月にかけて、小学校教員を対象として、山下によって行われた。なお、本実践事例については、文部科学省教員研修高度化事業の採択研究において、京都光華女子大学にて研究倫理審査の承認を受けている（承認番号23-16）。

3. 検証事例

3.1. 長期的専門性向上の支援方法

現在、教育現場では、教師の大量退職、大量採用が続いている。これは、1970年代前半の第2次ベビーブームへの対応として大量に採用された世代が定年を迎えつつあることから、同時に多数の若手教員が新規採用されているものである。文部科学省「令和4年度学校教員統計中間報告」によると、教員の平均年齢が小学校では42.1歳となり、前回調査（2019）より0.5歳低下している。2007年調査時の平均年齢が44.5歳であり、その時点から2022年調査に至るまで平均年齢の低下が続いている[10]。また年齢構成も1970年代の大量採用の影響により、その後の採用数が極端に少なくなっており、現在40、50歳代が少数となり、20、30歳代が大量に採用されているといういわゆる「瓢箪型」の年齢構成である。このことは、中堅、管理職世代の減少により教育技術や教育方法等の伝達が校内では難しくなっていることを示している。

教員は、学び続ける専門的職業人であり、その学びは効率的かつ効果的に行われるべきである。教育基本法第9条には、「法律に定める学校の教員は、自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努めなければならない」とある。しかし、昨今の学校現場では児童・生徒の多様化、教育課題の複雑化等が進行し、教員が自らの専門性を向上させるための研究や研修に充てる時間が制約されている。

従来の対面型研修では、時間的および地理的制約があるため、参加者全員が同時に集まることが難しく、また効果的な学びの場を提供する上で課題があった。こうした背景の中、Andy HargreavesとMichael Fullanらは、現代の教育現場において、教員が専門職としての知識と技術を深化させるためには、「実践とその影響力が公に検証され、循環され、採用される場」が必要であるとしている[11]。「そこでは、探究と即興性と試行錯誤とともに、正確さとイノベーションの絶え間ない融合が求められる。（中略）そしてそこで必要になるのは、現時点で最良の教育実践（すでに広く有効性が認められた教育実践）と、未来を形作る新しい教育実践（ときに教師たちによって始められる革新的なアプローチで、将来、最良の実践となり得る教育実践）を創造するための自由と空間と資源、この双方が出会い混ざり合う交点に関与することである」と述べている。このような場を設定するためには、対面研修とオンライン研修等を組み合わせたブレンディッド・ラーニング型の研修が不可欠であり、また、今までの教育実践知と革新的なアプローチを生み出すためには、研修内容の工夫や参加者の多様性、参加者相互の学びのコミュニティをつくるが必要となってくる。

そこで本研究では、教員が柔軟に学べる環境を提供するために、LMS を導入した。LMS を活用することで、オンラインでの自己研鑽と対面の相互交流を融合させ、従来の研修に比べて効果的かつ継続的な学びの場を提供することが可能となる。特に本項では、小学校国語科研修を事例とし、教員の長期的な専門性向上に資する方法について考察する。

本研究における小学校国語科研修実施にあたり、LMS を用いることで、教員はオンデマンドで学ぶことが可能となり、時間や場所にとらわれず、個々のペースで自己研鑽を行う環境が整備された。また、LMS のプラットフォーム上で教員同士が意見交換や実践報告を行う場を設け、リアルタイムでの交流に代わる新たなコミュニケーションの形態を提供した。この方法により、学びの時間的・空間的制約を軽減しつつ、質の高い研修を実施することが可能となった。

研修への参加募集は、近畿地方の教員、学校にメール配信をして募集を行った。結果、大阪府、兵庫県、奈良県、京都府、和歌山県からの参加があった。

図 3-1 は、本研究の小学校国語科研修に参加した教員（85 名）の教員経験年数の割合である。教員経験年数が、初年次から 30 年以上と幅広い年齢層から参加していることが分かる。また、「初年次～1 年未満」「1 年以上～5 年未満」「5 年以上～10 年未満」の教育現場におけるいわゆる若手教員の割合は、32%である。一方、

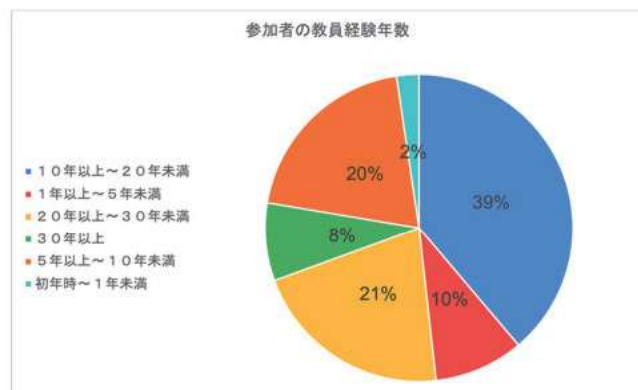


図 3-1 参加者の教員経験年数の割合

「10 年以上～20 年未満」の中堅・中核教員は 39%、20 年以上～30 年未満「30 年以上」のベテラン教員は 29%である。割合としては、どの経験年数層も一定数参加している。対面研修においては、中堅・中核教員の参加が少ないことがしばしば見られ、これにより指導技術の伝達が偏ったり、難しさが生じたりすることがある。中堅層は現場で培った経験を活かし、若手教員にとっては重要な模範となる存在である。しかし、中堅・中核教員の参加率が低い場合、研修全体の内容が初任層やベテラン層の視点に偏り、現場で即応可能な実践的スキルの共有が不十分になる可能性がある。さらに、研修を通じた世代間のスムーズな知識の継承や支援体制の強化が難しくなるため、全体の教育の質向上にも影響を及ぼしかねない。今回の LMS を活用したオンデマンド型研修では、年齢層については大きく改善することができた。

次に、長期的専門性向上の支援方法について、次の 3 項目で研修をデザインし、実施した。

- ① Canvas を活用したオンデマンド型研修と対面研修を組み合わせたブレンディッド・ラーニング型研修の構築
- ② 学びの継続性とコミュニティ支援
- ③ 評価システムの構築

①オンデマンド型研修と対面研修を組み合わせたブレンディッド・ラーニング型研修の構築

本研修は、オンデマンド型のLMSを活用した5週間の研修と、対面でのワークショップ形式の研修（1回）を組み合わせたブレンディッド・ラーニング型研修である（表3-1）。まずLMS型研修では、国語科授業づくりの重点ポイントや理論に関する解説を行い、参加者が自らの授業実践例や授業づくりのアイデアをLMS上で共有・交流することにより、理論と実践の融合を図った。また、LMS上で参加者同士が授業についての意見を交換することで、オンライン上での学び合いが促進される仕組みを導入した。対面研修では、教科書教材を用いた授業づくりのワークショップを実施した。参加者はグループに分かれ、それぞれのアイデアを共有し合い、互いに授業づくりの方法や工夫を学ぶ機会を提供した。この対面研修を通じて、参加者同士のコミュニティが形成され、学びを共有する場としての役割が果たされた。これにより、オンラインと対面での学習体験が統合され、参加者が実践的なスキルを身につけ、相互支援を行う環境が構築された。

表3-1 表1「小学校国語研修」の研修概要

週とテーマ	モジュール内容	提出課題
week 0 講座概要	0-1～0-5. 講座概要と学び方の説明	
week 1 「これからの国語の授業づくりで何が大切か」	1-1.子どもたちにつけたい資質・能力とは 1-2.今までの教育の反省 1-3.今までの国語科授業の反省 1-4.今、求められる国語科の授業づくりのポイント 1-5.自己の授業チェック 1-6.課題とコメントの投稿	1) 自己紹介 2) これからの国語科指導に必要なもの 3) このLMS研修で学びたいこと 1)～3)を投稿する。 4) 自分以外の2人以上にコメントを投稿する。
week 2 「つけたい力を育む効果的な言語活動とは」	2-0.第1週目の振り返り（自己評価） 2-1.言語活動とは何か 2-3.単元のゴールの設定 2-4.つけたい力にベストマッチした言語活動とは 2-5.言語活動のアイデア 2-6.課題とコメントの投稿	1) 「つけたい力に効果的な言語活動」を紹介する。 2) 自分以外の2人以上にコメントを投稿する。
week 3 「子どもの思考を耕す授業づくり」	3-0.第2週目の振り返り（自己評価） 3-1.学びの必然性 3-2.やってみたい、考えてみたい課題や発問の設定 3-3.子どもが試行錯誤する学びの設定 3-4.対話的で深い学びの実現 3-5.課題とコメントの投稿	1) 学びが充実する発問例や実践例を投稿 2) 自分以外の2人以上にコメントを投稿する。
week 4 「評価のあり方と子どもへの支援」	4-0.第3週目の振り返り（自己評価） 4-1.評価とは「指導に生かす評価」 4-2.評価とは「記録に残す評価」 4-3.パフォーマンス評価 4-4.評価規準、評価基準の設定のあり方 4-5.評価は子どもを支援するためにある 4-6.課題とコメントの投稿	1) 評価で工夫したこと、悩んでいることのエピソードを投稿 2) 自分以外の2人以上にコメントを投稿する。
week 5 「国語科における個別最適な学びと	5-0.第4週目の振り返り（自己評価） 5-1.協働的な学びとは 5-2.個別最適な学びとは 5-3.国語科における特別支援教育	1) 個別最適な学びと協働的な学びについての実践の紹介やアイデアを投稿する。

協働的な学び	5-4.学びのユニバーサルデザイン (UDL) 5-5.課題とコメントの投稿	2) 自分以外の2人以上にコメントを投稿する。
対面研修 「指導のアイデアの 交流とディスカッション」	教科書教材をもとに授業づくりのワークショップ	それぞれの学年グループに分かれて、三学期教材の授業づくりを行う。

② 学びの継続性とコミュニティ支援

LMS 上での学びを継続的に支援するため、毎週の講義を LMS に掲載し、参加者に課題を提示した。課題は、過去の授業実践の振り返りや、今後の授業づくりに関するアイデアを LMS 上に投稿し、その投稿に対して他の参加者がコメントするという形式である。85 名の参加者を約 13 名ずつのグループに分け、それぞれのグループが異なる年齢層の教員で構成されるように意図的にグルーピングした。これは、教員経験の異なる段階に応じて実践やアイデアの内容が多様であることを活かし、互いに刺激し合い、意見を広げたり深めたりすることを目的としたものである。この形式により、学びの継続性が確保され、年齢層や経験の異なる教員が自らの視点を共有し合うことで、研修の効果がさらに向上した。LMS 上での相互コメント機能により、各参加者が独自の考えを深めるとともに、他の参加者の視点から新たな気づきを得ることができた。結果として、学びが孤立することなく、コミュニティの一員として支え合う環境が形成されたのである。

③ 評価システムの構築

効果的な学びを支えるため、本研修では自己評価と目標設定を組み込んだ評価システムを構築した。各週のはじめに前週の活動を振り返り、自己評価を行うことで、自己の学びを見つめ直し、必要に応じて今後の学習目標を修正できるようにした。週の目標は研修の目的と到達目標に沿って明示され、参加者はその週に取り組むべきポイントを把握し、学びの意義を再確認できるよう工夫した。研修終了時には、アンケート形式での振り返りを実施し、研修全体についての自己評価を行った。この評価は、参加者が学びの過程を再確認し、次のステップへ進むための手がかりを得る機会を提供するものである。さらに、フィードバックによって参加者の意見や改善点が収集され、今後の研修プログラムの質向上にも寄与するものである。以上の評価システムにより、参加者は研修全体を通して自己の成長を実感しやすくなり、学びの継続に対する意識を高めることができる。また、このような評価システムの導入によって、個々の学びの進捗が明確化され、専門性向上に向けた長期的なサポートが可能となった。さらに、研修参加者は LMS を通じて自己評価をその都度行い、学びの進捗や課題に対する自己認識を深めるとともに、各セッションの感想や振り返りを記録することで、個々の学びの軌跡を視覚化したポートフォリオを作成した。このポートフォリオは、教員個々の学びの成果や自己成長を可視化し、次の学びのステップを考えるためのツールとして設定した。

4. 結果

4.1. 専門性を高めるブレンディッド・ラーニング型研修

Canvas を活用したブレンディッド・ラーニング型研修は、教員一人一人の学習ニーズに応じた柔軟な

環境を提供することで、時間的・空間的制約を超えた新しい学びの形を実現している。以下、受講者の研修後のアンケート調査を分析する。アンケートは、研修終了後に実施（2024年2月3日実施、有効回答43名）した。本節では、研修が小学校教員の指導力や専門性の向上にどのように寄与したかを分析する。指導力の向上については、「とてもそう思う」が58%、「まあそう思う」が42%を占め、オンデマンド形式を採用した参加者交流型研修が、指導力向上に有効であったことが示されている（図1）。さらに、この研修が専門分野の深化に有益であるとする肯定的な回答は100%に達し、そのうち「大変高い」と評価した割合は58%であった（図2）。この結果は、専門分野への関連度についても肯定的な回答が100%であり、「大変高い」とした割合が60%であることと一致している（図3）。また、本研修の内容を「今後、職務において活用すると思いますか」という設問に対して、「とてもそう思う」と回答した割合が91%であり、指導力や専門性について高い効果があったことを示している（図4）。

4.2 教員の協働的学びの促進

教員の専門性向上を図る上で、協働的学びの重要性はますます高まっている。教員同士が相互に知識や経験を共有し、共に成長する場を作ること、個別のスキル向上のみならず、教育現場全体の質を高める上でも不可欠である。本研究では、この協働的学



図1 指導力の向上についての効果



図2 専門分野を深めるための有益度



図3 専門分野を深めるための関連度



図4 研修内容の活用度

びを効果的に促進するために、LMS を活用したオンラインと対面を組み合わせたブレンディッド・ラーニングの手法を取り入れた。

まず、LMS のプラットフォーム上に教員同士が自由に交流できる場を設けることで、日常的な意見交換や課題の共有が可能となった。これにより、時間的・地理的な制約を超えて全国各地の教員が気軽に情報を交換し、相互の実践を参考にしながら新たなアイデアを生み出す機会が増加した。

LMS ではフォーラム機能やグループディスカッションを活用し、教員が各自の教育現場で直面する課題について自由に議論を深めることができた。また、研修内容に対するフィードバックや振り返りを共有することで、参加者間の相互理解が促進され、共に学び合う意識の向上が図られた。

このことは、事後のアンケート調査結果にも表れている。「グループメンバーからのフィードバックが学びを深めるために有効であったか」については、肯定的な回答が 100%を占め、そのうち「とてもそう思う」が 70%であった（図 5）。

また、『学びのコミュニティ』でグループで相互に学び合う形式の研修は、専門性の向上に役立つと思うか」については、肯定的な回答は 100%であり、「とてもそう思う」と回答した割合が 65%であった（図 6）。

さらに「グループメンバーからのフィードバックを今後の実践に活用しようと思うか」についても肯定的な回答が 100%に達し、「とてもそう思う」の割合が 63%であった（図 7）。

これらの結果から、受講者間のフィードバックが効果的に機能し、学びの深化に寄与していることが示されている。

次に、「グループメンバーからのフィードバックを今後の実践に活用しようと思うか」について、理由を自由記述したものを分析した結果、今後の実践に活用したい理由は以下の 4 観点に分類された。

(1) 知識・実践の共有意欲



図 5 メンバーからのフィードバックの効果の効果



図 6 専門性の向上についての効果



図 7 指導力の向上についての効果

研修受講者の記述からは、学びを個人に留めず、積極的に他者と共有しようとする意図が顕著に示された。例えば、「誰もが知りたいことだと思うので、どんどん発信していきたい」という記述に代表されるように、研修で得た知見を組織的に共有しようとする強い意欲が確認された。特に、「若い先生たちの指導力向上に役立てたい」「自分の学びを、同じ学年を担当している後輩たちに伝えたい」といった記述に見られるように、経験豊富な教員から若手教員への知識伝達の意図が明確に示されている。

(2) 組織的な学びの場の構築

研修内容を核とした新たな学びの場の創出に関する記述も多く見られた。「校内で自主研修を開き、同僚とも共有できている」「校内の研修を担当しているので、この講座で学んだことを校内の先生に伝えたり、紹介したりして学校全体で授業づくりをする」といった記述は、研修での学びを組織的な取り組みへと発展させようとする意図を示している。

(3) 対話的な学びの深化

研修自体が協働的な学びの場として機能していたことを示す記述も確認された。「同じグループの方たちとの学びも良かった」「授業づくりに関わる際に、活用させていただいて、いいディスカッションができた」といった記述からは、研修における対話的な学びの有効性が示唆される。また、「講師の先生やメンバーの方の実践事例から多くのヒントをいただいた」という記述に見られるように、参加者間での実践知の共有が新たな学びを生み出す契機となっていることが分かる。

(4) 学校改善への展開

個人の学びを組織的な授業改善へと発展させる意図も明確に示されている。「本校の研究内容に大いに活用できる内容であった」「学校全体で授業づくりをするために活用したい」といった記述からは、研修での学びを学校全体の改善に結びつけようとする志向性が読み取れる。特に、「教員全体の課題解決に向けた校内研究の題材として活用したい」という記述に代表されるように、学校の課題解決に向けた協働的な取り組みへの展開が意図されている。

以上の分析から、ブレンディッド・ラーニング型教員研修が、単なる個人の学びに留まらず、教員間の協働的な学びを促進する重要な契機となっていることが示された。特に、研修内容の共有可能性の高さと、それを活用しようとする教員の積極的な意図が、協働的な学びの展開を支える重要な要因となっていることが明らかになった。これらの知見は、今後の教員研修の設計において、協働的な学びを促進する要素を意図的に組み込む必要性を示唆している。

さらに、LMSを活用したオンライン学習ののちに講座の最後には、対面での研修も実施し、直接的なコミュニケーションの機会を設けた。対面研修では、教員たちはグループワークや実践的なワークショップを通じて、より深い議論や具体的な課題解決策を模索することができた。受講者が全ての研修を振り返って自由記述した感想をテキストマイニングで分析し、共起ネットワークにしたものが図8である。

中央に位置する「思う」「学ぶ」「研修」などのノードは、全体の議論の中心的なテーマを反映しており、研修参加者の意識や評価が集中していることを示している。「オンライン」「受ける」「自分」とい

ったノードが周囲に広がり、オンライン研修の特性や個々の学びのプロセスが強く結びついている様子が確認できる。特に、「オンライン」は「授業」や「学び」と直接的に関連し、オンライン環境での学びの効率性やアクセスのしやすさが重要な要素となっていることが読み取れる。さらに、「共有」「立場」「意見」「経験」といったノードが結びつき、研修参加者間の交流や多様な視点の共有が、研修全体の価値を高める要素となっていることが示されている。また、「課題」「取り組む」「考え」といったノードの

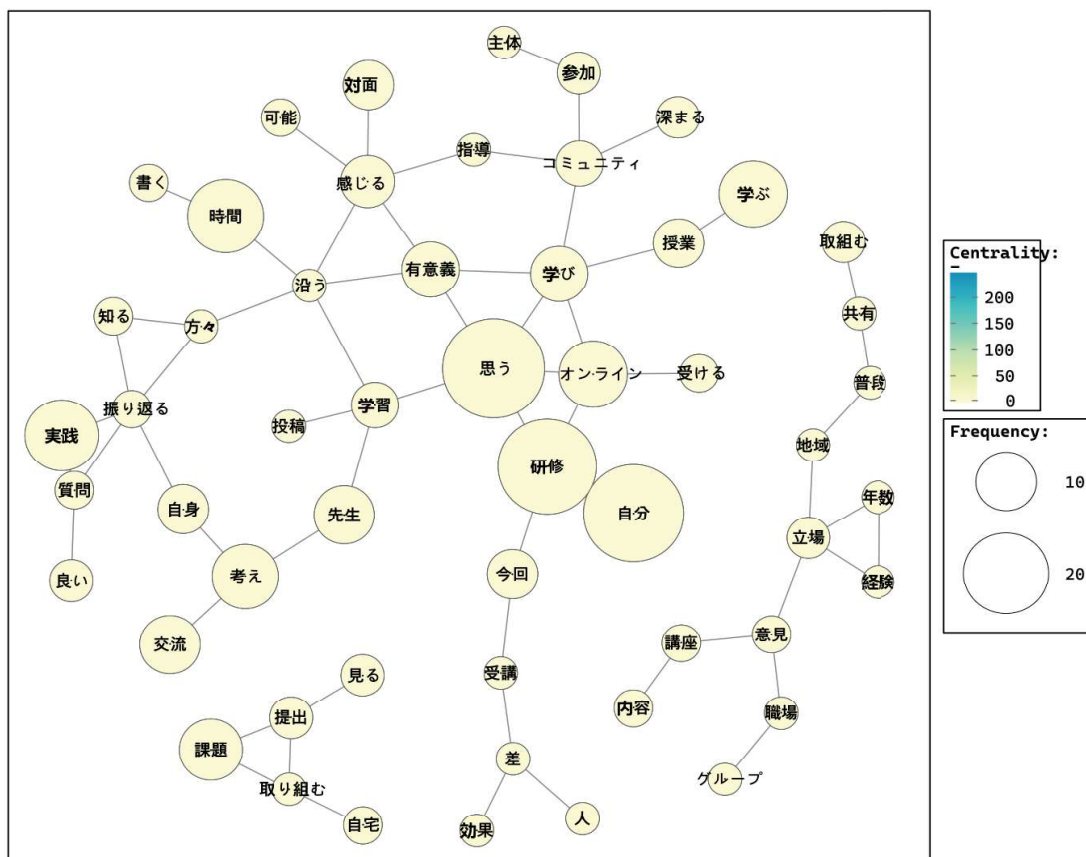


図8 研修の意義についての共起ネットワーク

関連性から、研修参加者が課題解決型の学びを通じて主体的に考え、実践に結びつけようとしている姿勢が浮かび上がる。全体として、この共起ネットワークは、オンライン研修が時間や場所の制約を超えた学びの場を提供し、個々の主体的な学びと多様な参加者間の協働的な学びを促進していることを示している。また、研修参加者が「フィードバック」や「共有」などを通じて学びを深める構造が形成されている点も特筆に値する。このことから、オンライン研修の設計において、個々の学びと集団的な学びを両立させる仕組みが極めて重要であるといえる。

最後に、受講者の研修の総括的な感想（自由記述）を分析すると次の5観点に分類される。

(I) 柔軟な学習環境による学びの充実

Canvas を活用したオンデマンド型の学習環境は、教員の多様な学習ニーズと生活状況に対応した柔軟な学びを実現している。「自分の環境に合わせて学べる」「子どもが小さいので、土日や子どもが寝た後

に自宅で研修を受けられる」という記述に見られるように、時間的・空間的制約を超えた学習機会を提供している。特に、「動画や資料から学んだことをいつでも何度でも確認できる」というプラットフォームの特性は、個々の理解度や学習ペースに応じた深い学びを促進している。また、オンラインでの継続的な学習と「最終日の対面研修」を組み合わせたハイブリッド型の形態は、それぞれの利点を相互補完的に活かした効果的な学習環境を構築している。

(II) 継続的な相互交流による学びの深化

4週間にわたる継続的な交流は、単なる意見交換を超えた学習コミュニティの形成をもたらしている。「だんだんと仲間意識のようなものができ、交流が楽しかったので課題もきちんと取り組むことができました」という記述は、情意面での支援が長期的な学習意欲の維持・向上につながっていることを示している。また、「お互いが『ニックネーム』だったことも考えを言いやすい要因になった」という指摘は、オンライン空間特有の特性が、立場や経験年数に関係なく率直な意見交換を促進する要因となっている。この協働的な学びの場は、「様々な立場の方たちの実践や考えを知ることができ、自分の考えが広がった」という教員の専門的な成長を支える重要な基盤となっている。

(III) 理論と実践の往還による専門性の向上

「理論を学び、実践を交流し、実践に対して受講者同士がフィードバックを行う」という学習サイクルが、教員としての専門性の段階的な向上に寄与している。「授業づくりにおいて大切にしたい観点について改めて確認することができた」という記述に見られるように、理論的な基盤の再確認と実践的な応用が効果的に結びついている。特に、「国語科における過去から現代への変遷や、現代の求められている授業づくり」について学ぶことで、自己の実践を相対化し、より広い文脈の中で捉え直す機会となっている。この理論と実践の融合は、「今まで、自分がしてきた国語科の指導の仕方、考え方をアップデートできた」という継続的な専門性の向上をもたらしている。

(IV) アウトプットを通じた主体的な学びの促進

「グループの人に向けてアウトプットする場があったので、『学びの必然性』が自然と生まれました」という記述は、他者との共有を前提とした学習活動が主体的な学びを促進する要因となっていることを示している。「毎回テーマがあり、そのテーマについて自分の実践や悩みを振り返る」という明確な課題設定と、「コメントをもらえることで、投稿する内容を真剣に考えました」という相互評価のプロセスは、学習内容の質的向上につながっている。このような評価システムは、「意見が変容していく」プロセスを可視化し、参加者の思考の深化と専門性の向上を支援している。

(V) 多様な実践知の共有による視野の拡大

「市のみならず、他の他府県の方と交流できた」という地理的な多様性に加え、「様々な立場の方、特に、様々な経験のある方との交流」が、実践知の幅広い共有を可能にしている。「管理職をしていますと、今日の前で行われている授業に疎くなったり」という管理職の視点や、「年代が違う先生の考えは勉強になりました」という世代間の学び合いなど、多様な立場からの知見が共有されている。これは「校内だ

けでは広がらない言語活動」についての理解を深め、新たな実践的知識の獲得につながっている。特に、オンラインと対面のハイブリッド型研修により、「最後の対面研修で深まりのある交流ができた」という、学びの統合と発展が実現されている。

このような多面的な学びの構造は、Canvas を活用したブレンディッド・ラーニング型研修が教員の専門性向上を支える効果的な研修方法であることを示している。特に、時間的・空間的制約を超えた学習機会の提供や、多様な教員間の協働的な学びの創出が、現代の教員研修に求められる重要な要素となっている。今後、理論と実践を往還させる場のさらなる拡充や、個々の学びと協働的な学びを一層深める仕組みを強化することで、教育現場全体の質的向上に寄与できるであろう。

5. 考察

本研究で実施したブレンディッド・ラーニング型教員研修は、Canvas を活用した学びのコミュニティの形成により、教員の専門性向上において顕著な効果を示した。特に、LMS 研修から対面研修へと進む形態は反転学習（Flipped Learning）の特徴を有しており、知識習得と実践的な学びを効果的に実現している。Canvas のシンプルで使いやすいディスカッション機能は、教員間の知見の共有と実践知の蓄積を促進し、学びのコミュニティの基盤として機能した。この学習環境により、教員は理論や実践例を事前に学び、それらを自身の教育実践と結びつけた考察を行い、さらに対面研修ではその学びを深化させた。対面研修では、より実践的な議論や演習を通じて、具体的な指導力の向上につなげることができた。このような段階的な学びの構造は、教員研修の効果を最大化する上で極めて有効であることが示された。

教員は「学び続ける専門職」として位置づけられており、その学びは OJT（On the Job Training）として日常の教育実践と密接に結びついている必要がある。しかし、児童・生徒の多様化や教育課題の複雑化が進む中、従来の対面型研修では、教員が研修時間を確保することが困難になっていた。本研修では、Canvas を活用した非同期型（オンデマンド）学習を導入することで、教員が自身の業務スケジュールに合わせて柔軟に学習時間を設定できる環境を実現した。これは、教育現場における働き方改革の推進にも寄与するものである。特に、日々の授業実践や校務分掌との両立が可能となり、研修で学んだ内容を即座に実践に活かし、その結果を研修内で共有するという循環的な学びが可能となった。このような実践と研修の往還は、教員の専門性向上において極めて重要な要素であり、本研修モデルの大きな特長となっている。

特筆すべきは、本研修が中堅・中核教員の参加を促進できた点である。従来の対面研修では、校務分掌や部活動指導等の時間的制約により、中堅・中核教員の参加が困難であった。オンデマンド型学習の導入により、これらの教員も自身の都合に合わせて研修に参加することが可能となった。同期型（オンタイム）ではなくオンデマンド型を選択したことで、時間的制約の克服と学習の質の保証を両立することができた。中堅・中核教員の参加は、研修全体の質的向上にも大きく寄与している。彼らの豊富な実践経験に基づく意見や助言は、若手教員の成長を支援するとともに、ベテラン教員の知見を補完する重要な役割を果たしている。また、学校運営の中核を担う立場にある彼らの参加により、研修で得られた知見を組織的な実践改善につなげやすい環境が形成された。

本研修を通じて形成された学びのコミュニティは、教育実践知の継承における Sustainability の観点からも重要な意義を持つ。異なる経験年数の教員が同一のプラットフォーム上で交流することで、若手教員は中堅・ベテラン教員の実践知に学び、中堅・ベテラン教員は若手教員の新しい視点から刺激を受けるといふ、双方向的な学びが実現した。これは、教育実践知を持続的に継承・発展させていく上で極めて重要な成果である。特に、これまで暗黙知として個々の教員に蓄積されていた指導のノウハウや教育実践の工夫が、Canvas のプラットフォーム上で可視化され、共有財産として蓄積されていく点は、教育の質を持続的に向上させていく上で重要な意味を持つ。また、この学びのコミュニティは、教員の世代交代が進む中で、教育実践知を次世代に確実に継承していくための効果的な仕組みとしても機能している。

Canvas を活用した学びのコミュニティの形成は、教員の専門性向上を支える新たなチームビルディングの可能性を示すとともに、「現時点で最良の教育実践」と「未来を形作る新しい教育実践」を融合させる場としても機能している。参加者は地理的・時間的制約を超えて交流し、互いの実践から学び合うことで、学校や地域を超えた教員間のネットワークを構築することができた。このような「つながり」は、教員の孤立を防ぎ、継続的な成長を支える重要な基盤となっている。特に、共通の課題や関心を持つ教員同士が自然発生的にサブグループを形成し、より専門的な議論や実践の共有を行う様子も観察された。これは、従来の学校単位や地域単位の研修では実現が困難であった、専門性に基づく学びの共同体の形成を示唆している。さらに重要な点は、すでに広く有効性が認められた従来の教育実践知と、教員たちによって始められる革新的なアプローチが、このプラットフォーム上で出会い、混ざり合い、新たな教育実践を生み出す可能性が開かれたことである。このような教育実践知の創造的な融合は、研修終了後も継続的な学び合いの場として機能することが期待される。

ブレンディッド・ラーニング型研修は、教職の高度専門職性を支える効果的な研修モデルとして、今後の教員研修の在り方に大きな示唆を与えるものである。特に、Canvas を活用した学びのコミュニティの形成は、これからの時代に求められる教員の継続的な専門性向上を実現する上で、極めて有効な手段となることが示された。時間的・空間的制約を超えた学びの場の提供、世代を超えた教育実践知の継承、そして教員同士の協働的な成長を支援する本研修モデルは、今後の教員研修のスタンダードとなる可能性を秘めている。教育現場におけるデジタルトランスフォーメーション（DX）が加速する中、本研修モデルはその変革を担う教員の育成にも寄与するものである。特に、Canvas を活用した研修自体が、DX を体現する学びの場となっており、教員自身がデジタル技術を活用した学びを経験することで、その教育実践への応用も促進されている。このように、本研修は単なる知識・技能の習得の場を超えて、教育のデジタル化時代における教員の意識改革と実践力向上を支援する重要な役割を果たしているのである。

今後の展望として、本研究で確立したブレンディッド・ラーニング型研修モデルをさらに発展させる可能性が広がっている。まず、学びの成果を可視化する新たな指標やツールの開発により、教員の成長過程をより詳細に把握し、個々の教員に最適化された学習支援が実現できるだろう。特に、AI を活用した学習分析や、VR/AR 技術を用いたインタラクティブな模擬授業体験など、最新のテクノロジーの導入により、より豊かな学びの機会が創出されることが期待される。

さらに、本研究で形成された「学びのコミュニティ」は、今後、地域や学校の枠を超えた全国規模の教

員ネットワークへと発展する可能性を秘めている。Canvas のような使いやすいプラットフォームを基盤とし、教員同士が時間や場所の制約を超えて学び合い、支え合う文化が醸成されていくだろう。この動きは、教育実践知の共有と創造を加速させ、日本の教育全体の質的向上にも大きく貢献するものと考えられる。

本研究で開発した5種類の評価シート(成果報告書[3]、pp75～88)は、今後の教員研修の設計・実施・評価における重要なツールとして機能していくことが期待される。これらのシートを活用し、改善を重ねることで、より効果的で持続可能な研修システムの構築が可能となる。教員の専門性向上を組織的かつ継続的に支援する体制が、全国各地で整備されていくことだろう。

教育のデジタルトランスフォーメーション (DX) が加速する中、本研修モデルはその変革を先導する重要な役割を果たすことができる。教員自身がデジタル技術を活用した新しい学びを体験し、その経験を教育実践に活かすことで、学校教育全体の革新的な進化が促進されるだろう。そして、それは単なるデジタル化にとどまらず、教育の本質的な変革と質の向上をもたらすものとなる。

このように、ブレンディッド・ラーニング型研修は、教員の専門性向上を支える新たな学びのスタイルとして、大きな可能性を秘めている。本研究で得られた知見を基盤として、さらなる実践と研究を重ねることで、すべての教員が生涯にわたって学び続け、成長し続けることができる、豊かな教育環境の実現が期待される。それは、未来を担う子どもたちの学びの質を高め、より良い教育の実現につながっていくであろう。

謝辞

本研究は、令和4年度教員研修高度化モデル開発事業採択研究『Canvas を活用したブレンディッド・ラーニング(BL)型研修に係る成果指標と評価モデルの開発—「学びのコミュニティを形成する LMS」を組み込んだ BL 型研修の成果と評価—』(研究代表者、高見茂)によって行われた研究成果の一部である。

本研究の遂行にあたり、多大なご支援とご協力をいただいた研究メンバーの谷本寛文先生、田中耕治先生、小松郁夫先生、柴恭史先生、田縁眞弓先生、臼井義比古先生、全京和先生、小野寺かれん先生、河原聡子先生、西川潤先生、秋山知宏先生、井料央智さん、岡澤節さん、山迫花寧さんに深く感謝申し上げます。先生方および大学院生の皆様には研究の計画段階から実施、評価に至るまで、多角的な視点からご指導とご助言、ご協力をいただき、本研究の質的向上に多大なご貢献をいただきました。

参考文献

- [1] 中央教育審議会, “「令和の日本型学校教育」を担う新たな教師の学びの姿の実現に向けて,” 2021. https://www.mext.go.jp/content/20211124-mxt_kyoikujinzai02-000019122_1.pdf (accessed Nov. 01, 2024).
- [2] 中央教育審議会, “『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～(答申),” 2022. https://www.mext.go.jp/content/20221219-mxt_kyoikujinzai01-1412985_00004-

- 1.pdf (accessed Nov. 01, 2024).
- [3] 京都光華女子大学, “令和4年度教員研修の高度化に資するモデル開発事業 成果報告書 Canvasを活用したブレンディッド・ラーニング(BL)型研修に係る成果指標と評価モデルの開発―「学びのコミュニティを形成する LMS」を組み込んだ BL 型研修の成果と評価―,” 2024. https://www.mext.go.jp/content/20240722-mxt_kyoikujinzai01-000037075_0116.pdf (accessed Nov. 01, 2024).
 - [4] Instructure, “CANVAS,” 2024. <https://www.instructure.com/canvas> (accessed Nov. 01, 2024).
 - [5] B. Means, Y. Toyama, R. Murphy, M. Bakia, and K. Jones, “Evaluation of Evidence-Based Practices in Online Learning: A Meta-Analysis and Review of Online Learning Studies,” 2009, Accessed: Nov. 24, 2024. [Online]. Available: <http://repository.alt.ac.uk/629>
 - [6] U.S. Department of Education, Office of Planning, Evaluation, and Policy Development Policy and Program Studies Service, “Evaluation of Evidence-Based Practices in Online Learning: A Meta-Analysis and Review of Online Learning Studies Revised September 2010,” 2010. <https://www.ed.gov/media/document/finalreportpdf-4> (accessed Nov. 01, 2024).
 - [7] H. Staker, “The rise of K-12 blended learning: Profiles of emerging models,” *Innosight Institute*, May 2011, Accessed: Nov. 27, 2024. [Online]. Available: <https://eric.ed.gov/?id=ed535181>
 - [8] 長濱澄, 渡邊文枝, and 重田勝介, “ブレンディッドラーニングに関する教育工学研究の動向と展望,” *日本教育工学会論文誌*, vol. 46, no. 4, pp. 601-616, 2022.
 - [9] 杉浦真由美 and 重田勝介, “ブレンド型授業の設計を支援する教員研修プログラムの開発,” *日本教育工学会論文誌*, vol. 46, no. 4, pp. 679-694, Dec. 2022.
 - [10] 文部科学省, “令和4年度学校教員統計（学校教員統計調査の結果）確定値,” 2022. https://www.mext.go.jp/content/20240321-mxt_chousa01-000030586_1.pdf (accessed Nov. 01, 2024).
 - [11] マイケル・フランアンディ・ハーグリーブス, “専門職としての教師の資本: 21世紀を革新する教師・学校・教育政策のグランドデザイン,” 金子書房, 2022, p. 126.

Building Learning Communities on Canvas with Blended Learning for Teacher Training

—Professional Development and Growth of Teachers

supported by a New Type of Training—

Sachi TAKAMI, Atsuko YAMASHITA, Kunihiro TAKAMATSU

Enhancing teacher expertise is critically important for improving educational quality. Following the 2021 Central Education Council Report, the Council presented outlining directions for new teachers' learning to promote a "Japanese-style education for the Reiwa era," which identifies the following five key elements: 1) proactive attitudes, 2) continuous learning, 3) "individually optimized learning" based on teachers' characteristics, 4) "collaborative learning" ensuring opportunities for dialogue and reflection, and 5) achieving "proactive, interactive, and deep learning" for teachers.

The authors developed evaluation indicators under the Ministry of Education's "Teacher Training Advanced Model Development Project," focusing on blended learning training using the Canvas LMS for creating learning communities for teachers. Five case studies were conducted implementing Canvas-based training as a new form of teacher training. Canvas, which is widely used in North America's higher education, allows trainees to access content on-demand without time or location constraints and features user-friendly discussion functions. Our research results reported nearly 100% participant satisfaction with Canvas-based training methods.

Out of the five case studies, this paper focused on the elementary teacher training to examine how Canvas-based blended learning enhance teacher expertise. The findings suggested that Canvas-based learning community contributed to improve teaching skills and deepens expertise through: 1) feedback among participants, 2) learning opportunities unrestricted by time and space, and 3) promotion of knowledge sharing and mutual learning among teachers with diverse experiences.